

王質夫と白樂天：白居易の盩厔時代

静永，健

<https://doi.org/10.15017/2559302>

出版情報：文學研究. 93, pp. 51-74, 1996-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

王質夫と白楽天

——白居易の整屋県尉時代——

静 永 健

異なつた人生を歩む人々との出会いが、その人物の人生観に、微妙な、あるいは時に重大な変化をもたらすことがある。

王質夫。質夫は字と思われるが、本名は不詳。排行十八。この人物は、白居易（字は樂天）が整屋県尉⁽¹⁾在任時代に知り合つた友人として、かつ、文学史的には、白の代表作「長恨歌」の成立に際し、その創作を慫慂した人物として特に記憶されている。また、我が国の大江維時『千載佳句』（巻下、詩酒）および藤原公任『和漢朗詠集』（巻上、秋興）等に収録され、『平家物語』（巻六、紅葉の段）にも重要な役割を果たす瀟洒な倒装表現の名句——

林間暖酒燒紅葉　林間に酒を暖めて　紅葉を燒き

石上題詩掃綠苔　石上に詩を題して　綠苔を掃ふ

が、後年、白が王質夫に与えた七言律詩中に見える一聯であることも忘れてはなるまい（「送王十八歸山寄題仙遊寺」⁽²⁾、卷十四、律詩、元和四年作）。

本稿は、白居易の元和元年（八〇六）四月から翌二年秋までの整屋県尉時代に着目し、彼の文学的軌跡を逐い、ついで、その時彼に最も影響を与えたと思われる王質夫との交流と、その意義について考察しようとするものである。

王質夫については、管見の及ぶ限り、新旧『唐書』等、唐人に関する諸伝記資料に一切語られるところがない。整屋県に住む一介の無位無冠の士である以上、史書に名の見えぬのは、もとより已むを得ないことではある。そこで、いま我々が王質夫について知ろうとする時、その大半は、白居易が唱酬した詩篇より彼の閱歴を跡付けてゆく他なく、その作品群は、以下の如く、およそ次の三つの時期に区分できるのである。

第一期…白居易の整屋県尉赴任時代（元和元年四月～翌二年秋）…五首

〔作品番号…〇二一・〇二二・〇六九・〇四五・〇四七〕

第二期…白居易が翰林学士として中央に召還された後の長安時代（元和二年秋～十年秋）…五首

〔作品番号…〇〇五・〇〇五・〇〇〇・〇七五・〇三八〕

第三期…白居易の忠州刺史在任時代（元和十四年三月～翌十五年夏）…三首 〔作品番号…〇五三・〇四七・〇五五〕

このうち、第三期に於て、白居易は次に挙げるかなり長篇の代書詩を彼の許に寄せている（〇五三、卷十一、感傷三、元和十四年作）。ここでは内容上三段に分けて示す。

寄王質夫

王質夫に寄す

憶始識君時 愛君世縁薄 憶ふ始め 君を識りし時 君が世縁の薄きを受す

我亦吏王畿 不爲名利著 我亦亦た王畿に吏たりて 名利の爲には著さず

春尋仙遊洞 秋上雲居閣 春は尋ぬ 仙遊の洞 秋は上る 雲居の閣

樓觀水潺潺 龍潭花漠漠 樓觀に 水は潺潺 龍潭に 花は漠漠

吟詩石上坐 引酒泉邊酌 詩を吟じて 石上に坐し 酒を引きて 泉辺に酌む

因話出處心 心期老巖壑 因りて話す 出處の心 心に期す 巖壑に老いんと

詩の前半十二句は、往時の回想である——君（王質夫）と知り合つた頃、私（白居易）は世の中に淡泊な君の生き方を敬愛した。その頃は、私もまた一介のしがない畿内の小役人で、名利の為に齷齪することもなく、春は仙遊寺の洞窟、秋は雲居寺の高閣にと、よく連れだつて遊んだものだ。樓觀台に小川がせせらぎ、龍潭の畔には一面の花々……。次の一聯には、まさに先の「林間暖酒」の句そのままの情景が回想されていよう。すなわち二人は、大きな石の上であぐらをかいて詩を吟じ、泉に向かいながら酒を酌み交わす日々を過ごしたのである。その時、話題となるのは人の出処進退のあり方。二人は、世俗を謝絶した岩山で心静かに老いを送ろうと誓い合つたのだった。

しかし、そのような将来の理想（あるいは夢想）に対し、現実は無残にも二人の期待を裏切つていった——

忽從風雨別 遂被簪纓縛 忽ち風雨の別に従ひ 遂に簪纓の縛を被る

君作出山雲 我爲入籠鶴 君は山を出でし雲と作り 我は籠に入れる鶴と為れり

籠深鶴殘頼 山遠雲飄泊 籠深くして 鶴は残頼し 山遠くして 雲は飄泊す

去處雖不同 同負平生約 去く處 同じからずと雖も 同に負く 平生の約

今來各何在 老去隨所託 今來 各々何れに在る 老い去りて 託する所に随ふ

我守巴南城 君佐征西幕 我は巴南の城を守り 君は征西の幕を佐く

嵐のような世の荒波の中で、二人はたちまち別れの時を迎え、とうとう宮仕えに縛られてしまった。君は山を出でたはぐれ雲、私は籠の中の鶴。鶴は悴れ果て、雲はさすらう。行く先は違つても、昔の約束に背いているのは同じこと。二人は今、老いさらばえて各々の役職にしがみついているばかり。私は巴の南、忠州の刺史、君は西戎征伐の幕僚となり、そうして——

年顔漸衰颯 生計仍蕭索

年顔 漸く衰颯し 生計 仍りに蕭索

方舍去國愁 且羨從軍樂

方に去國の愁ひを含くも 且つ從軍の楽しみを羨む

舊遊疑是夢 往事思如昨

旧遊 疑ふらくは是れ夢 往事 思へば昨の如し

相憶春又深 故山花正落

相憶ふ 春 又た深く 故山に 花 正に落ちなん

相貌は年々衰え、それでもなお生活はままならない。ともに都を離れた愁いを抱いてはいるが、でも私には君のような從軍生活の氣樂さが羨ましい。あの整屋での日々がまるで夢のようだ。まだ昨日のように懐かしい。ああ、春たけなわ、遙か仙遊山にまた花が散ることだろう……。

わずか一年餘の短い期間ではあったが、整屋での二人の交流がいかに思い出深く、かつ屈託の無いものであったかが、この詩から窺い知ることができる。

白居易の詩篇の中で、この第三期の代書詩は、彼が王質夫に贈った詩としては久方ぶりのものである。というのは、さきの作品分期にも明らかのように、元和十年秋から十四年春までの江州司馬左遷期において、白居易には王質夫への言及が見られないのである。察するに、この間、白は王の消息を知らず、また、王も連絡を取れないままであったのであろう。或は、白の左降官としての身の上が、双方に幾ばくかの躊躇を強いていたのかもしれない。しかし、ささやかながらも、忠州刺史として晴れて返り咲いた白居易に、再び王との交流は回復した。よって、この詩には、それまでの二人の交流のほぼ一部始終が総括されていると言ってよい。白居易は、十餘年前の楽しく氣儘な日々をここに追懷しているのである。

ところで、この詩の後半部の記述より、当時の王質夫が、既に整屋を去り、「征西の幕」の属官として、ようやく微禄にありつける身分に達していたことが知れる。もとより一州の刺史とそれとは、社会的にも、経済的にも格段の差異がある。だが、白居易は旧友の就職をひとまず嘉し、いささか社交辞令的に「從軍生活は氣樂だねえ」と彼を慰

めるのである。

しかし、喜びも束の間、程なく白居易の許に届いたものは、他ならぬ王質夫の急逝の報であった。

哭王質夫

王質夫を哭す

仙遊寺前別 別來十年餘

仙遊寺前に別れ 別れて來^{このかた} 十年餘

生別猶怏怏 死別復何如

生別 猶ほ怏怏たるに 死別 復た何如

客從梓潼來 道君死不虛

客 梓潼^よ從り來たり 道^いふ 君が死は虚ならずと

驚疑心未信 欲哭復躊躇

驚疑して 心に未だ信ぜず 哭さんと欲して 復た躊躇す

踟躕寢門側 聲發涕亦俱

踟躕す 寢門の側 声発すれば 涕も亦た俱^もにす

衣上今日淚 篋中前月書

衣上 今日の淚 篋中 前月の書

憐君古人風 重有君子儒

憐む 君に古人の風あり 重ねて君子の儒有りて

篇詠陶謝輩 風襟嵇阮徒

篇詠は 陶謝の輩 風襟は 嵇阮の徒なるを

出身既蹇迤 生世仍須臾

出身 既に蹇迤し 生世 仍りに須臾たり

(以下八句略)

(〇五七、卷十一、感傷三、元和十五年作)

梓潼(劍南道劍州、今の四川省梓潼県)から來た旅人が、君の死が嘘ではないと言う。私は驚きのあまり信じることが出来ず、ただおろおろするばかり。寢所までおろおろと帰れば、声とともに涙がこぼれ出る。わが衣には今日の涙、文箱には先月の書簡……。この「篋中の前月の書」とは、恐らく先の「寄王質夫」詩に前後する王からの書信を指すと思われるが、すなわち、王の死は、白居易には全く予期せぬ急なものであり、二人は旧交を十分暖めることもないまま、死別の時を迎えたもののようである。以下、白居易は、故人の在りし日を偲びつつ、その急逝を惜しむ詩句を連ねている——君には阮籍・嵇康にも相通じる古人の風采があり、しかも士大夫としての立派な教養を備え、そ

の詩歌は陶淵明・謝靈運にも匹敵していた。しかし、その人生行路は尽く困難を極め、おまけに驚くほど短かった……。

また、白居易は、この詩に相前後して、元宗簡（排行は八）にも次のような詩を書き送っている。

哭諸故人因寄元八

諸故人を哭し、因りて元八に寄す

昨日哭寢門 今日哭寢門

昨日 寢門に哭し 今日も寢門に哭す

借問所哭誰 無非故交親

借問す 哭する所は誰ぞ 故交の親に非ざる無し

偉卿既長往 質夫亦幽淪

偉卿 既に長往し 質夫も亦た幽淪

屈指數年世 收涕自思身

指を屈して 年世を数へ 涕を収めて自ら身を思ふ

彼皆少於我 先爲泉下人

彼 皆 我より少きに 先に泉下の人と為れり

（以下十句略）

（〇五五、卷十一、感傷三、元和十五年作）

「偉卿」と呼ばれる人物については不詳。ただし、詩の脈略より、その訃報が王の死とほぼ同時に届いた友人のようである。白居易は、相次ぐ親友の訃報に接し、自身の寂寞の感を強めていったのである。

さて、ここに特筆すべき点は、偉卿という人物と共に、王質夫が「我より少^{わが}」いと言われていることである。もとよりその年齢差は、一二年乃至は数年に止まるものであり、二人は殆ど同輩というに近い間柄であったと考えられる。してみれば、この表現は、われわれにとって王質夫の年齢を知る唯一の手がかりとなるものであり、翻って、藍屋泉での王白兩人の交遊する姿を思い描くに、それは、三十五歳、制舉及第を果たしたばかりのピカピカ役人（白）と、三十前後の、村に住む一布衣（王）との、穢れ無く、若々しい交際の風景であったと想像される。二人は、そこで酒を酌み交わし、詩を吟じ、また、将来の夢を語り合った。夢は、果たして夢でしかなかった。しかし、二人にとっては、生涯忘れ得ぬ美しい思い出となっていたに違いないのである。

では、それが如何なるものであったか。次に第一期の作品群より、その様子を更に窺つてみたい。

二

招王質夫

王質夫を招く

自此後詩爲整屋尉時作

此れ自り後の詩は整屋尉為りし時の作

濯足雲水客 折腰簪笏身

濯足す 雲水の客 折腰す 簪笏の身

諠閑跡相背 十里別經旬

諠閑 跡 相背^{そむ}き 十里 別れて旬を経たり

忽因乘逸興 莫惜訪蠶塵

忽ち逸興に乗ずるに因らば 蠶塵を訪ふを惜しむ莫れ

窗前故栽竹 與君爲主人

窓前に 故に竹を栽^{こぞさ}ゑ 君が与に主人と為らん

(〇二八、卷五、閑適一、元和元年作)

『漁父辞』に登場する漁父そのままに、濁世に染まらず、日夜山中の雲や小川とともにある自由人王質夫。対して私は、薄俸に腰を屈め、不自由な役人生活を送る身の上。喧噪と静閑、互いに踏み行く道を異にしたまま、二人は十里の距離を既に十日も経てしまった。でも、気が向いたら、何時でもすぐにお越し下さい。むさくるしい拙宅の窓前に、わざわざ竹を栽えたのは、あなたをお招きせんがため……。

この詩は『白氏文集』卷五、すなわち「閑適詩」としてまとめられる四巻のうち、その第一巻の七首目に配される作品である。詩の題下には「自此後詩爲整屋尉時作」とあり、以下九首(〇二八～〇三六)が、閑適詩中に収められる白の整屋県尉時代の作品と判断される。白居易にとって、この王質夫との交遊が、彼の整屋県での最も懐かしい思い出であろうことは、この詩に続き、次に以下のような詩が配されていることから容易に推察されるところである。

祇役駱口因與王質夫

駱口に祇役し、因りて王質夫と、

同遊秋山偶題三韻

同に秋山に遊び、偶ま題せる三韻

石擁百泉合 雲破千峯開

石は百泉を擁擁きて合し 雲は千峯を破りて開く

平生烟霞侶 此地重徘徊

平生の烟霞の侶と 此の地に重ねて徘徊す

今日勤王意 一半爲山來

今日 勤王の意 一半は 山の爲に來たる

(〇二六、卷五、閑適一、元和二年作)

ところで、県尉の職にあつた白居易が、友人王質夫に対し一貫して見せる横顔は、前詩中の「折腰」という陶淵明の故事の援用に明らかなように、官職に就いていることに否定的な、全く世間に背を向けた相貌である。後の「祇役駱口」詩においても、その詩題に示されるとおり、県南の駱谷関への公務の出張であるにもかかわらず、秋の山色を「同遊」した楽しさのみが唱われているのである。もとよりそれは、一つには、王質夫が、白居易とは異なる無位無冠の身分であるため、その配慮からなされた白の謙遜、或は韜晦の措辞と解釈し得るであろう。しかし、この二首中に示される白の現在の官職とその職務に対する表現(「折腰簪笏身」「諠」「囂塵」また「今日勤王意・一半爲山來」)は、いったい白居易のどのような心理に基づくものなのであろうか。王質夫を思いやる気持ちの表れとは言え、制科及第直後の白居易に、それらはあまりにも消極的かつ不遜な言辭ではないだろうか。特に後詩に於ては、題頭に「祇役(王命による出張)」の二字があり、更に詩の末尾には「今日ここに王命を奉じて出向く気持ちになったのは、半分はこの山景に惹かれたからだ」とまで言い切っているのである。

この時、白居易が拝命していた「県尉」という官職は、県における最下級の品官(正九品下)であるが、唐代、將來の宰相候補たる人物に試される、言わば「名譽の下放」であつた。その詳細については、既に礪波護氏に論考があり、同文に拠れば、この整屋等、上県以上の尉には一般に二名以上の者が任命され、一名は「戸口の按比、農桑の課

植、賦役の催驅」といった主に民生部門を、一名は「非違の檢察」といった刑法部門を分掌し、特に白居易は前者の司戸担当の尉であったと論定されている。白は、元和元年四月、皇帝の特別試験である制科（才識兼茂明於体用科）を高成績で及第し、その結果、ここ整屋県に赴任して来たのであった。

しかし、このように中央への栄転が約束された官職とは言え、その在任中、白居易には、心底何か遣り切れぬものがあつたものようである。

京兆府新栽蓮

京兆府の新栽の蓮

時爲整屋尉趨府作

時に整屋尉^{なり}爲りて、府に趨^{おもむ}きての作

汚溝貯濁水 水上葉田田

汚溝 濁水を貯め 水上に 葉は田田たり

我來一長歎 知是東溪蓮

我 来たりて一^しりに長歎す 知るは是れ 東溪の蓮

下有清泥汚 馨香無復全

下に清泥の汚す有りて 馨香 復た全き無く

上有紅塵撲 顔色不得鮮

上に紅塵の撲つ有りて 顔色 鮮かなるを得ず

物性猶如此 人事亦宜然

物性 猶ほ此くの如く 人事も亦た宜しく然るべし

託根非其所 不如遭棄捐

託根 其の所に非ざれば 棄捐に遭ふに如かず

昔在溪中日 花葉媚清漣

昔 溪中に在りし日 花葉は 清漣に媚びたるに

今來不得地 頗頼府門前

今^{いま}来 地を得ずして 頗頼す 府門の前

(〇〇三、卷一、諷諭一、元和二年作)

京兆府の門前、水の濁った堀端に移植された蓮とは、まさに今、新たに赴任して来たばかりの、白居易その人の姿であった。「人事も亦た宜しく然るべし。」彼はここに適材適所とは言えぬ自己の境遇を映し、「棄てられた方がましだ（不如遭棄捐）」とまで考えているのである。この時期、白居易の詩には、後年のような悠々自適の境地は見

られない。特に、その職務を詠む場面となると、先の「祇役駱口」詩のように、時として「愚痴」とも取れそうな否定的な言辞が連ねられてゆくのである。それは何故か。察するに、一つにはその職務（貧困な農民からの徴税）の辛さ、また俸給の低さに在るかもしれない。或は、先にも述べた、白居易が応試した制科に於て、友人の元稹が三等（実質上の首席）、彼が四等（次席）で及第し、白が今かくも地方役人としての辛酸を舐めているにもかかわらず、七歳下の元が一足飛びに左拾遺（従八品上）に拔擢されたことが挙げられるかもしれない。⁸

しかし今一つ考えられることは、かかる特殊な試験によって除官されたことによる、周囲の反応である。制科及第によって一躍官界のエリート⁹の道を約束されたことが、周囲の無言の反発を喚び、彼等を予想だにできなかった窮地に陥れるということは、我々現代社会に生きる人間にも十分推測可能なことである。現に、その元稹は、左拾遺拝命の後、僅か四ヶ月餘で河南県尉に左遷されているのである。⁹

この元稹の事情は、実は白居易にも十分当て嵌まるように思われる。今、『白氏文集』の自注等を手がかりに、¹⁰ 藍屋赴任時代の白詩を数えれば、それは合計三九首。¹¹ うち、藍屋での職務上の同僚に贈ったと考えられるのは卷九の「酬李少府曹長官舎見贈（李少府曹長が官舎にて贈れるに酬ゆ）」（四三）一首しか無い。李少府については不詳。少府は尉の雅名である。だが、これはどうしたことであろうか。かつて白居易は、校書郎であった時（貞元十九年）、同僚八人に對し十六韻の五言詩を寄せ、常樂里の拙宅に招いたこともあった。しかるに、ここ藍屋での白は、県衙の同僚や上司に對し、その詩文唱酬に於て、実に冷淡な態度で臨んでいるように見受けられるのである。

しかも、その残された詩作を見る限りにおいて、藍屋での白居易は、自己の職務に必ずしも心から勤勉であったとは言えない。それは、先にも述べたように、自己の役職への「暴言」や、今挙げた県衙内での同僚間の詩文唱酬の少なきからも判断されるが、更には、本稿の主眼とする王質夫等在県の布衣文士との極めて親密な交流からも逆に裏付けられよう。彼は前掲「招王質夫」詩に於て、官舎の窓辺に「故に」竹を栽え、その來訪を待ちこがれていた。この

「故」字に込められた白居易の心情は、単に「村里の閑人を招く」というような呑気なものでは無いようにも推察され得るのである。

加えて、ここで、この時期の詩を改めて通覧するに、そこには、かかる布衣文士との交流のほかに、白居易の自然の景物に対する一種凄まじいまでの執着を看取することができる。

整屋縣北樓望山

整屋県の北樓より山を望む

自此後詩爲畿尉時作

此より後の詩、畿尉為りし時の作

一爲趨走吏 塵土不開顔

一たび趨走の吏と為り 塵土に顔を開かず

辜負平生眼 今朝始見山

平生の眼を辜負せしが 今朝 始めて山を見ゆ

(六三三、卷十三、律詩、元和元年作)

「山」は太白山。整屋県はその山陰の裾野に位置している。県の北樓に登り、南望すれば、眼下には「塵土」とも称すべき整屋の城市が見えたはずである。これまで、白居易はこの城市の眺めに「顔を背けてきた（不開顔）。しかし今日、その眺望にみとめたものは、城市の向こうに聳える太白山の悠然とした姿であった。彼はここに自己のこれまでの眼を「無駄に使ってきた（辜負）」と告白する。この詩は、白居易が太白山（およびその北嶺の仙遊山）の自然を再発見した、まさに記念すべき作品と言えよう。また、次の詩はどうであろうか。

遊雲居寺贈穆三十六地主

雲居寺に遊び、穆三十六地主に贈る

亂峯深處雲居路

亂峯深き處 雲居の路

共踏花行獨惜春

共に花を踏みて行き 独り春を惜しむ

勝地本來無定主

勝地は 本来 定主無し

大都山屬愛山人

大都^{オホ} 山は山を愛する人に属す

(六四、卷十三、律詩、元和二年作)

「山は、山を愛する人のものだ」とは、現代の登山家のいささか感傷的な口吻に似る感もあるが、山の所有という現実的な問題に、政治や経済といった所謂世事を度外視しようとする彼の発言は、文学史的にも極めて異例なように思われる。しかるに、このような言辞の来源は、白居易の自然に対する異常なまでの執着心と、それに表裏する現実社会からの疎外感にあるのではないだろうか。

人は、何かに支えられ、或は何かを支えとして生きねばならない動物である。それは、一つには「信仰」と言い得るものであるかもしれない。しかしこの時、白居易にとつての「支え」は、太白山を中心とする「自然」であり、かつ、それと自己の心情とを結びつけ得る「文学（詩作）」ではなかったか。よつて、彼は、実に狂わんばかりに自然を詠じ、その詩作に没頭した。この時期、彼は庭先の薔薇にまで、次のような詩を贈っているのである。

戲題新栽薔薇

戯れに新栽の薔薇に題す

時尉盤屋

時に盤屋に尉たり

移根易地莫憔悴

根移り 地易^かはるも 憔悴する莫れ

野外庭前一種春

野外 庭前 一種^{ひとし}き春

少府無妻春寂寞

少府は妻無く 春 寂寞

花開將爾當夫人

花開^さかば 爾^もを將て夫人に当てん

(〇三六、卷十三、律詩、元和二年作)

かつて、平岡武夫氏は、この詩の転結句を引用し、「この時、彼はなお結婚していなかった。しかし機は熟しつゝあった」と語られ、翌元和三年の白と楊氏との結婚を考証し、この詩にいう「薔薇」に既にモデルとなる人物がいた

ことを論じられた。⁽¹³⁾ 筆者も、この「戯題」詩にかかる白居易の〈内なる期待〉を秘めるとする説に賛同するものである。しかし、この詩には、如何に彼の晩婚（白の結婚は三七歳）の悲哀が読み取れるにせよ、その口吻は餘りにも尋常でなく、かつ惨めなほどに滑稽である。ここにはやはり、当時整屋にあっての白の周囲の事情と彼の詩作への没頭が推定されて然るべきものではないだろうか。彼はこの時、結婚への期待と不安、そして極度の緊張感を、このように「戯題」の詩に託することにより、かろうじて紛らせていたのである。

三

さて、以上のことを踏まえ、本稿の主題である白と王質夫との交流に再び話頭を戻したい。

送王十八歸山寄題仙遊寺

王十八の山に帰るを送り、仙遊寺に寄題す

曾於太白峯前住

曾て 太白峯前に住まひ

數到仙遊寺裏來

數ば^{しばしば} 仙遊寺裏に來たる

黒水澄時潭底出

黒水 澄める時 潭底出で

白雲破處洞門開

白雲 破るる處 洞門開く

林間暖酒燒紅葉

林間に酒を暖めて 紅葉を燒き

石上題詩掃綠苔

石上に詩を題して 綠苔を掃ふ

惆悵舊遊無復到

惆悵たり 旧遊 復た到る無く

菊花時節羨君廻

菊花の時節 君が廻るを羨む

この詩は、本稿第一章の冒頭にも示した如く、白居易が翰林学士となった長安時代、つまり第二期の作品である。

ところで、この詩は前述の頸聯の倒装表現に加え、首聯にも旧来の詩の格律に合わない点がある。すなわち、「於」
「到」という、古典詩には定着度の希薄なへ場所を示す前置詞が組込まれている上に、七言句の基本型ともいえる上四字下三字の韻律のリズムを逸脱し、意味的には「曾／於太白峯前／住、數／到仙遊寺裏／來」（或は「曾於／
…、數到／…」という、所謂「折腰体」の句型を採っているのである¹⁴。これは頸聯の「暖酒↑焼紅葉」「題詩↑掃
緑苔」という原因と結果とを倒置する表現と相俟って、詩全体に洒脱な、或は放埒な雰囲気を与えてゐる。

これは、本稿がこれまでに挙げてきた王白二人の交流の実情と共に、整屋県での白の異常なまでの詩作への執念の、
正しくその根源となるものを我々に指明しているのではなからうか。「祇役駱口」詩に於て「勤王の意の一半は山の
為に来ったのだ」と詠じ、「遊雲居寺」詩に於て「山は山を愛する人のものだ」と嘯き、庭前の「薔薇」に「花開か
ば夫人にしよう」とまで妄言する白居易の姿は、この王質夫への送別詩中に溢れる放埒な言動と軌を一にするもの
があるであらう。

整屋県での鬱鬱とした日々を過ごす白居易に、生きる糧を与え、その詩人としての人生を開眼させたのは、実にこ
の王質夫ではなかったか。筆者のこの推論の終着点は、他でもない陳鴻の「長恨歌伝」の次の一節にある。

元和元年冬十二月、太原白樂天、自校書郎尉于整屋。鴻與琅邪王質夫、家于是邑。暇日、相攜遊仙遊寺、話及此
事、相與感歎。質夫舉酒於樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消没、不聞于世。樂天深於詩多
於情者也。試爲歌之如何。樂天因爲長恨歌。

元和元年冬十二月、太原の白樂天、校書郎より整屋に尉たり。鴻と琅邪の王質夫、是の邑に家す。暇日、相携
へて仙遊寺に遊び、話 此の事に及び、相与に感歎す。質夫 酒を樂天が前に挙げて曰く、「夫れ 希代の事

は、出世の才に遇ひて之を潤色するに非ざれば、則ち時と与に消没し、世に聞こえず。楽天は詩に深く情に多き者なり。試みに^{たゞ}之を歌ひては如何？」と。楽天 因りて長恨歌を為る。

(那波本『白氏文集』卷十二所引)

仙遊寺での酒会に於て、五十年前の玄宗楊貴妃の事件が話題になる。その時、王質夫はやおら盃を挙げ、不世出の詩人白居易にこの悲劇の翻歌を慫慂した。稀代の名歌は、実にこの一時の座興に端を発したのである。

ところで、この「長恨歌」については、その主題が那邊にあるか、今もなお定論が無い。¹⁶陳鴻の「伝」が、この一節に続けて「意は、但だに其の事に感ぜしのみならず、亦た尤物（災厄を起こす絶世の妖女）を懲らし、乱階を^{ふみ}塞ぎ、将来に垂れんと欲するなり」とし、また翻つて故事部分の末尾に、玄宗が仙界の楊貴妃から死の予告をされ、日々驚愕しながら崩じる場面を説いていること等から、この作品が「戒め」を眼目とした叙事詩と見ることも可能である。

一方、当時の妓楼で流行したという事実等から、甘美な悲恋の物語詩とする説も棄て難い。

だが、筆者が、敢えてここにこの問題への微小な一石を投ぜんとするに、本稿に於て見たる王質夫と白居易の交流の情況は、世間を白眼視した、実に放埒極まるものであり、寧ろそこに自分達の価値観を見出そうとするものであった。だとすれば、この「長恨歌」の創作意図は、やはり玄宗と楊貴妃の悲恋の演出に在り、よつて他を教導しようなどという陳鴻の解釈は、王白二人は夢想だにしていなかったものと考えられるのである。従つて王質夫は、酒興に誘なわれるまま、この「希代の事」を「詩に深く情に多い」白居易に慫慂し、白居易もまた、この皇帝と寵妃の恋物語を何ら明確な貶辞を記すことなく展開し、かつ、その結末を長生殿での密誓の告白¹⁹によつて締め括つたのではないだろうか。

四

さて、以後数度の邂逅が認められるものの、白居易と王質夫との親密な交流は、元和二年十一月、白の翰林学士昇進を期に終止する。そして白は、再び元稹等との交友関係に復するのである。ところで、ここに白居易・元稹・王質夫の三人をめぐる、一つの興味深い事実がある。

駱口驛二首

駱口驛 二首

東壁上有李二十員外逢吉、崔二十二侍御韶使雲南題名處、

北壁有翰林白二十二居易題擁石、關雲、開雪、紅樹等篇、

有王質夫和焉。王不知是何人也。

東壁上に李二十員外逢吉、崔二十二侍御韶が雲南に使用するの題名の処有り、北壁に翰林白二十二居易の「擁石」、「関^{とど}せる雲」、「開^はれし雪」、「紅^{もも}せる樹」等の篇を題し、王質夫が焉に和せる有り。王とは是れ何人なるかを知らざるなり。

郵亭壁上數行字

郵亭の壁上 數行の字

崔李題名王白詩

崔李が題名 王白が詩

盡日無人共言語

尽日 人の共に言語せる無きも

不離牆下至行時

牆下を離れざるまま 行時に至る

(其二 略)

(元稹集卷十七、元和四年作)

この詩は、元稹が元和四年三月、監察御史として四川の劍南東川節度使巡察に赴いた際の詩をまとめた「使東川」

と題する七言絶句二十二首の、その第一首である。詩題の「駱口駅」とは、正しく整屋県の南境、駱谷関の麓にある駅亭である。当時、ここは都長安と漢中・四川とを結ぶ交通の要衝であった。⁽²⁾ 元稹は、この壁上に李逢吉、崔韶の題名と、白居易の題壁詩とをみとめ、出発の時刻を忘れるまでに読み耽ったというのである。この白居易の題壁詩数篇は、現在その全てを確認することが出来ないが、自注の最初に挙がる「擁石」は、本稿第二章に掲げた「祇役駱口」詩の第一句「石擁百泉合」に符合し、元稹が目親したものは、或はこの作品ではなかったかと考えられる。

だが、問題は、この壁上に、白詩と共に王質夫の和詩が書かれていたということである。しかも、元稹は王のことを「どんな人か知らない」と注記するのである。これまで見て来た通り、王質夫は白居易の整屋に於ける親友であった。しかも、「長恨歌」の創作を白に促したことは、陳鴻の「伝」にも明らかである。しかるに何故、白のもう一人の親友元稹は王質夫の名を知らなかったのだろうか。⁽²⁾

このことは、白居易の整屋県尉時代を知る上で、一つの示唆を与えてくれるであろう。すなわち、白居易にとって整屋での日々は、察するに、元稹等中央官界の友人達には、あまり知られたくない惨めな下積み生活であった。しかも、そこで交流した王質夫等布衣の文士達とのことなどは、中央に召還された今となつては、その頃の役務の餘暇の一琐事でしかない（現に本稿で瞥見したそれら諸作品は、見方によつては一種の気晴らしのような口吻を伝えていた）。されば、整屋で創作された詩とその唱酬の相手のことは、本来白居易の胸臆にひっそりと秘められるべきものであり、實際元和四年の時点で、元稹が王質夫の存在を知らないのは、実は白居易の側にこそ、その理由があったと言えるのではなからうか。

ちなみに、白居易が元稹等に王の名を告げなかったことは、彼の立場上、当然取らねばならぬ礼儀であったとも考えられる。というのは、翰林学士として皇帝の側近となつた今、妄りに在野の文士の名を口にすることは、場合によっては、その人物の推薦と取られなくもない。かかる理由からも王質夫の名前は故意に隠されていたと見ることも、あ

ながち否定できないであろう。⁽²³⁾

しかるに、この問題は更に白居易とその整屋での代表作「長恨歌」との関係についても一考を要しよう。それは、これまでの研究にも夙に指摘のある通り、白居易が「長恨歌」の大流行に対し、あまり良い印象を持たず、時としてこれに大いに不満の言を吐いていることである。⁽²⁴⁾

従来、これに関しては、「長恨歌」の内容に於ける諷諭性の欠如、或は予想外の流行に対する一種の照れ隠し⁽²⁵⁾である等の説がある。しかし、先に第三章末尾にも述べた如く、「長恨歌」は、その成立時の創作意図を推察するに、果たして「諷諭」を目的として詠まれたかどうかとも疑わしく、また、照れ隠しの要素は否めないにしても、その不満の言動は餘りにも激し過ぎるように思われる。

そこで、より穩当な解釈を付すならば、やはりこの白居易の整屋時代全体に対する隱蔽姿勢に繋がるものと考えられないだろうか。白居易は、強いて言えば「あれは田舎での座興の作だ」程の感想しか「長恨歌」に懷いていなかった、或は懷こうとしていなかった、とも考えられるのである。

白居易と王質夫、そして「長恨歌」。翰林学士として都長安に戻った彼は、ひたすらこの関係を否定し、隱蔽しようとした。王質夫の名を口にせず、「長恨歌」の流行にも専ら背を向けようとしたのである。それは、皇帝の側近に選ばれ、元稹等と共に「諷諭詩」を創作し、社会の問題に正面から取り組む姿勢をみせたことも大いに関係しよう。例えば「新樂府五十首」の発表は、一つにはその「長恨歌」への作者本人による挑戦であり、言わば、世上の人士の腦裏から前作を抹殺せんとした活動であつた、とも考えられるのである。⁽²⁶⁾ 彼は、自己の整屋県での交友関係とその詩作を、その社会的立場から、これを自ら切り棄てようと試みたのではなかっただろうか。

さりとて、整屋県での関係は、一方で白居易の以後の人生に深大な影響を及ぼしたことは疑いない。「諷諭詩」を發表する傍ら、彼は全く別の立場から「閑適詩」そして「感傷詩」の創作を同時並行させている。⁽²⁷⁾ 自身の榮達、すな

わち次代の宰相となるために、一心不乱に官場での競争を生き抜いてゆくべきでありながら、時として、純粹無垢な
《詩人》の境涯に己が人生を当て嵌めてみようとするのは、この王質夫との出会いによって萌芽した、彼の新しい価値観に拠るものではないだろうか。

翰林学士として《諷諭詩》の創作に没頭していた頃にあつて、白居易はやはり王質夫を、そして仙遊寺での遊覧の日々を、決して完全に忘却し去つたわけではなかった。最後に挙げる二首は、かかる彼の心情を最もよく窺わせている。

翰林院中感秋憶王質夫

翰林院中にて秋を感じ、王質夫を憶ふ

王居仙遊山

王は仙遊山に居す

何處感時節	新蟬禁中聞	何れの処か	時節を感じず	新蟬	禁中に聞こゆ
宮槐有秋意	風夕花紛紛	宮槐に秋意有り	風夕	花は紛紛たり	
寄跡鴛鴦行	歸心鷗鶴群	跡を寄す	鴛鴦の行	心を帰す	鷗鶴の群
唯有王居士	知予憶白雲	唯だ王居士の	予が白雲を憶ふ	を知る有るのみ	
何日仙遊寺	潭前秋見君	何れの日に	仙遊寺の	潭前に	秋君に見はん

(OBCO、卷九、感傷一、元和三年作)

禁中寓直夢遊仙遊寺

禁中寓直、夢に仙遊寺に遊ぶ

西軒草詔暇	松竹深寂寂	西軒	草詔の暇	松竹	深くして寂寂
月出清風來	忽似山中夕	月出で	清風來たれば	忽ち山中の夕に似たり	
因成西南夢	夢作遊仙客	因りて成す	西南の夢	夢に遊仙の客と作る	
覺聞宮漏聲	猶謂山泉滴	覺めて宮漏の声を聞くも	猶ほ謂ふ	山泉の滴かと	

白居易の整屋県尉時代の思い出は、一見素知らぬふりを見せつつも、彼の胸底の奥深くにしっかりと残された。そしてそれは、彼のもう一つの顔である〈閑適詩〉と〈感傷詩〉となつて、詩人白居易の重要なモチーフを切り拓く役割を果たし、以後、その方向は次第に拡大、確立されていった。つまり、詩人白居易の最も詩人たる面を開眼させたのは、実にこの王質夫との整屋県での交流であつたと言えるように思われるのである。

(一九九五年十月三十日 在福岡)

注

(1) 整屋は、中国陝西省西安市の西郊約六〇キロのところにあり、現在は地名を周至(整屋と同音)とする。唐代の行政区分では、畿内、すなわち京兆府の管轄下の一県となる。なお、「長恨歌」のヒロイン楊貴妃は、その北方約二〇キロ、渭水を挟んだ対岸の馬嵬で、悲劇の最期を遂げた。

(2) 本稿は四部叢刊初編所収那波道圓翻朝鮮古活字本『白氏文集』(以下は那波本と略称)を底本とし、適宜諸本を参照する。また、同版本は白居易の自注の大部分を削去しているため、これを南宋紹興年間の刊本を影印する『白氏長慶集』(台湾・藝文印書館一九八一年二月再版)によつて補う。また、白居易の作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店 一九七四年七月再版)に依拠し、更に各作品の制作年代は同書を基本としつつ、朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社 一九八八年十二月刊)および羅聯添『白居易年譜』(台湾・国立編訳館 一九八九年七月刊)の考証を参照し、これを比定した。

(3) この時期、白居易の作品中に「王夫子」詩(五六、卷十二、元和十三年作)が有り、朱金城『白居易集箋校』第二冊六三一頁は「疑為王質夫。」との注記を付すが、詩の内容に蓋然性を欠く。就中その冒頭に「王夫子、送君為一尉、東南三千五百里」とあるが、この人物は遠隔地の一県尉(例えば『旧唐書』地理志に拠れば、江州の南、撫州は京師東南三千三百一十二里)となり得た者であり、本稿が考証する王質夫の経歴にそぐわない。

(4) 房玄齡等撰『晋書』卷九四隱逸伝 陶潜伝に「潜歎曰、吾不能為五斗米折腰、拳拳事鄉里小人邪。」とある。なお、白居易後年の詩「早熱二首」其一、三〇五、卷六三、太和九年作)に「忽思公府内、青衫折腰吏」とあるのも、この整屋県尉時代を回想し

(5) 礪波護「唐代の鼎尉」(京都大学文学部史学研究会「史林」第五七卷第五号、一九七四年九月)。

(7) 白居易が自己の現在の俸給を詩に詠じることは、宋・洪邁『容齋五

(8) 白居易は「権摂昭応、早秋書事、寄元拾遺、兼呈李三

(9) 元稹は、皇帝憲宗に奉じた上書が、時の執政官達の反感を買い、元和元年九月十日、河南尉に左遷された。

塵土驚動勳。一語不中治、**管筆身満瘡**』とあることによっても、これを窺い知ることができる。ところで、この鰐屋県尉赴任の

(11) 作品番号のみを掲げれば左の通り。

【閑適】卷五：〇八一・〇八二・〇八三・〇八四・〇八五・〇八六・〇八七・〇八八・〇八九・〇三。

【律詩】卷十三：〇六三五・〇六三六・〇六三七・〇六三八・〇六三九・〇六四〇・〇六四一・〇六四二・〇六四三・〇六四四・〇六四五・〇六四六・〇六四七・〇六六三・〇六六四

王質夫と白樂天

(13) 平岡武夫「白居易とその妻」(東方学報第三六冊 京都大学人文科学研究所 一九六四年十月)。

(14) 白居易の詩に、このように韻律のリズムと意味のリズムとを故意にずらせた句が見られることは、松浦友久「白居易のリズム——詩型とその個性——」(白居易研究講座第一巻「白居易の文学と人生Ⅰ」勉誠社一九九三年六月刊)に考察されている。

(15) 安祿山の乱により玄宗が蒙塵し、馬嵬坡にて楊国忠・楊貴妃が誅殺されたのは、天宝十五載(七五五)六月のこと。

(16) 詳しくは新聞一美「白居易の長恨歌——日本における受容に關連して——」および塞長春(訳・下定雅弘)「長恨歌の主題に關する議論——『長恨歌』にこめられた悲劇の重層性——」(ともに白居易研究講座第二巻「白居易の文学と人生Ⅱ」勉誠社一九九三年七月刊)参照。

(17) 白氏文集所引陳鴻「長恨歌伝」の当該部分は以下の通り。「因(楊貴妃)自悲曰、『由此一念、又不得居此、復墮下界、且結後緣。或为天、或為人、決再相見、好合如旧。』因言『太上皇亦不久人間。幸惟自安、無自苦耳。』使者還奏太上皇。皇心震悼、日不豫。其年夏四月、南宮晏駕。」(括弧および傍点は筆者)。なお陳鴻「長恨歌伝」には本稿の主として依拠した『白氏文集』所引のもの他に、『太平広記』所収のもの、『文苑英華』卷七九四に附載する『麗情集』及び『京本大曲』系統のもの(二本があり、三者間には著しい異同がある。これらについて竹村則行「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷(上)』(九州大学中国文学会「中国文学論集」第二十四号 一九九五年十二月)は、『太平広記』本は『白氏文集』本の刪略であるが、『麗情集』本こそが、陳鴻の原作に近く、『白氏文集』本は、それを白居易自身が刪易を加えたものであることを細かに精査されている。ただし本稿では現在の通行本である『白氏文集』所引本を掲載した。

(18) 白居易「与元九書」(四六)に次の三条が挙げられる(傍点は筆者)。

○「其餘詩句、亦往往在人口中、僕慙然自愧、不之信也。及再来長安、又聞有軍使高霞寓者、欲娖倡妓、妓大誇曰、『我誦得白学士長恨歌、豈同他妓哉。』由是增衒。」

○「又昨過漢南日、適遇主人集衆樂娛他賓。諸妓見僕來、指而相顧曰、『此是秦中吟・長恨歌主耳。』」

(19) 「臨別殷勤重寄詞、詞中有誓兩心知。七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願作比翼鳥、在地願作連理枝。天長地久有時尽、此恨綿綿無盡期。」

(20) 冀勤 点校『元稹集』(全二冊、中華書局 一九八二年八月刊)。なお、元稹の作品の繫年考証は花房英樹『元稹研究』(葉文堂 一九七七年三月刊)を参照した。

(21) 例えば『資治通鑑』唐紀五五、憲宗元和元年正月の条には、当時、四川で起こった劉闢の反乱を鎮撫するため、李元奕の軍(歩

騎二千」がこの駱谷関を通過したとの記事が見える。

- (22) またこれは、陳鴻の「伝」に対しても、興味深い問題を提起していよう。すなわち、この元和四年の時点で、陳鴻の「伝」はまだその成立を見ていなかった、或は、作られていたとしても、白居易の「歌」のように長安の巷間に流布していなかったと考えられるのである。

- (23) しかし、白居易が王質夫に贈ったと思われる作品のうち、「送王处士詩」(○○〇、卷一、元和三～六年作)は、唯一「諷諭詩」に分類されているものである。長安召還後の白を訪ね、再び整屋に帰る王を送るこの作品は、冒頭に都の王侯貴族達の傲慢無礼を述べ、それに「独り衣を払」い、決然と辞去する王質夫の姿を詠じている。或はこの時、王質夫は都で何らかの求職活動に奔走していたようにも推測され、かつ、この白詩は、王を慰め、その潔癖さを強調することによって、彼を推薦しようとする意図があるようにも見受けられる。しかし以後、二人の関係にも微妙な亀裂が生じていたようである。例えば、第二期の作品のうち、「贈王山人」詩(○○〇、卷五、閑適一、元和六～九年作)は、減食によって「長生の訣」を得ようとする彼に、その考え方の浅薄さを指摘し、「無生を学ぶに如かず、無生は即ち無滅」だと窘めるものである。

- (24) 白居易「与元九書」を再び参照すれば、白の「過漢南日」のエピソードに続き以下のように述べられている(傍点は筆者)。

○「自長安抵江西三四千里、凡郷校・仏寺・逆旅・行舟之中、往往有題僕詩者、士庶・僧徒・嬬婦・処女之口、毎毎有詠僕詩者。此誠雕蟲之戯、不足為多、然今時俗所重、正在此耳。」

- (25) 照れ隠しの説は、桑原武夫「白楽天の社会詩について」(吉川幸次郎・桑原武夫共著『新唐詩選統篇』所収 岩波新書 一九五四年五月刊)に見える。

- (26) 白居易における「諷諭詩」理念の成立と、「長恨歌」と「新樂府」の内容の矛盾については、後日、稿を改めて考察することとしたい。

- (27) これに関しては、拙稿「白居易における詩集四分類についての一考察——特に関連詩・感傷詩の分岐点をめぐって——」(九州大学中国文学会「中国文学論集」第二十号 一九九一年十二月)を参照されたい。

- (28) 白居易が実は生涯を通じて宰相になることを夢見ていたことは、近年、下定雅弘氏によって考証された(宰相になれなかった白居易)・帝塚山学院大学中国文化研究会「中国文化論叢」第四号 一九九五年四月)。

- (29) 例えば、白居易のこのような意識については、拙稿「白居易は果たして「李白の墓」を訪れたか」(九州中国学会報「第三三巻 一九九五年五月」)を参照されたい。

〔附記〕

なお、王質夫の本名は「全素」であろうとの考証が、岑仲勉『唐人行第録』（上海古籍出版社 一九七八年三月新版）一五頁、および吳汝煜主編『唐五代人交往詩索引』（上海古籍出版社 一九九三年五月刊）一四六頁等に見える。これは、元稹に「二月十九日酬王十八全素」と題する次の五言絶句（元稹集卷十五、元和十二年梁州での作）があることに基づくものである。

君念世上川、嗟予老瘵天。那堪十日內、又長白頭年。

詩中、元稹は王の前歴や特に白居易との交流について何ら言及するところが無い。しかし、排行の一致とともに、「質夫」と「全素」という字と名の近似、また、詩の詠まれた梁州（今の陝西省漢中市）が王質夫の客死した梓潼（四川省梓潼県）と蓋座とのちょうど中間点にあたることなどから、極めて信憑性が高い。まことに奇縁というほか無い。